日誌法による母子間の「離れる一近づく」の様態に関する研究

小島康生

(中京大学)

キーワード: 「離れる一近づく」、母子、日誌法

Cross-sectional study on daily mother-child separation: Diary-based approach

Yasuo KOJIMA

(Chukyo University)

Key Words: daily separation, mother-child, diary

目 的

本研究は、親子関係の発達、子どもの成長を 親子の「離れる一近づく」の様態の変化としてとらえることをねらいとする。はじめのうちは、親は一日の大半を子どものそばにいて過ごす、時間がたつにつれ、親が子どもから離れた、反対に子どもが親から離れたりを繰り返すようになっていく。さらに、親子が離れて過ごす時間も距離も、次第に長くなっていくのがふつうである。つまり、こうしたことを繰り返しながら、親は自由に動ける時間を確保し、子どももまた親からの自立を成し遂げていくのだといえる。

本報告では、1～3 歳までの子どもとその親(母親)の間に起こる「離れる」の実態を日誌調査から横断的に調べようとするものである。

方 法

愛知県N市にある子育てサークルの参加者である母子に対し、日誌調査への協力依頼を行った。サークル活動中に筆者が直接、日誌を手渡し、以下のことを連続5日間、記録してほしいと伝えた。記録後の日誌は所定の封筒で返送してもらい、協力者には後日、図書カードが送られた。30 名に日誌を手渡し、22 名の回答が得られた。

記録内容は次の3点である。すなわち、1) 子どもを家に残して母親が外出した、2) 子どもと一緒に外へ出かけ、外出先で子どもと離れた、3) 母親は家に残り、子どもが外出した、の3つである。1)～3) のいずれも、子どものそばに他者がいたか、離れている間、子どもを何をしていたかも記録してもらった。

結 果

子どもの平均月齢は33.5 ヶ月齢 (range: 17–46) であった。これを17–25 ヶ月齢 (6 名)、28–38 ヶ月齢 (7 名)、39–46 ヶ月齢 (9 名) の3群に分けて比較した。

1) 子どもを家に残しての母親の外出

子どもを家に残して外出したひとは年齢の上昇とともに増え、39–46 ヶ月齢では9 名全員から報告が得られた (図1)。17–25 ヶ月齢児の母親のケース (1 例) を詳しく見ると、子どもは19 ヶ月齢で第二子であった。5 日のあいだに3 回そのような記録があり、2 回は子どもの昼寝中で、子どものそばには誰もいなかった (10 分以内)。28–38 ヶ月齢でも母親の外出は子どもの昼寝中が多く (20 例中16 例)、買い物などや時間のかかる外出もあった。昼寝中などは、子どものそばに他者がいないケースも多かったが (20 例中8 例)、大人 (夫、祖父母) がそばにいることのほうが多く (同10 例)、年長のきょうだいと遊んでいる間の外出も2 例あった。39–46 ヶ月齢以上になると、買い物等での外出がさらに増え (10 例中4 例)、2 時間を超える外出も3 例含まれていた。年長のきょうだいの留守番が3 例あった。留守中の子どもの行動については、テレビ、おやつなどがあった (それぞれ4 例、2 例)。

2) 外出先での子どもとの分離

外出先で母親が子どもと離れるケースは17–25 ヶ月齢でもよくあり (6 名中4 名、図2)、2 時間以上離れたという人もいた。子どものそばに誰がいたかを分析した結果では、17–25 ヶ月齢、28–38 ヶ月齢では必ず大人 (夫、祖父母、ママ友、幼児教室の先生) がそばにいたのに対し、39–46 ヶ月齢では、子どもたちだけ (子ども+きょうだい、子ども+子どもの友達) を置いて母親が離れるケースもあった (2 例)。39–46 ヶ月齢では、子ども一人を置いて離れたケースも1 例あった。

3) 母親と離れての子どものお出

17–25 ヶ月齢では6 名中わずか1 名であったが、28–38 ヶ月齢、39–46 ヶ月齢ではそれぞれ7 名中4 名、9 名中5 名から報告が得られた (図3)。いずれの年齢群でも、子ども1 人 (あるいは子どもたちだけ) での外出はなく、必ず誰か大人が同行していた。外出先は、すべての年齢群を通じて、家のすぐ前、近くの公園、散歩などが多かったが、39–46 ヶ月齢では、スーパー、別の人の家 (2 例中2 例とも祖父母の家) などもあった。

考 察

母子が離れて過ごすことに関連する3つのパターンを検討した結果、いずれも月齢の上昇にともない報告が増えていくことがわかった。子どもを残して母親が外出する場合、昼寝が重要な契機となること、また他者 (とくに大人) がそばにいることも条件として重要であることが明らかになった。また、テレビやおやつなどモノの存在が母子の分離に欠かせない可能性も示唆された。今後、年齢幅を広げてデータ数を増やし、同時に縦断的なデータも確保したいと考えている。

本研究は、平成24年度科学研究費補助金 (基盤研究 (C)、課題番号: 24530839、研究代表者: 小島康生) による助成を受けて行われたものである。